(3) 「ニダーナ・カター」(*Jātaka*, vol. I, pp. 49, 52.『南伝大蔵経』における邦訳、一〇五、一〇九ページ)、*Buddhacarita* II, 18.『太子既に生まれてより始めて七日を満つるとき、その母は命終わる。』(『過去現在因果経』第一巻、大正蔵、三巻、六二七ページ下)

(4) *Buddhacarita* II, 19.『そのとき太子の姨母たる摩訶波闍波提は太子を乳養し、母の如く、異なること無し。』(『過去現在因果経』第一巻、大正蔵、三巻、六二七ページ下)

(5) インドにおける似た例として、Śaṅkarācārya という名のうちの ācārya は、敬称ではなくて、個人名の一部なのである。

(6)『増一阿含経』第五〇巻、大愛道般涅槃品第五十二(大正蔵、二巻、八二一—八二二ページ)、『大愛道般泥洹経』(同上、八六七—八六九ページ)、『仏母般泥洹経』(同上、八六九—八七〇ページ)。

(7) イクシュバーク朝・三世紀・ナーガールージュナコンダ〈『デリー博』p. 161, No. 52〉。

(8)〔太子の教育に関する伝説〕*Saṅghabhedavastu*, Part I, p. 57 ; *Buddhacarita* II, 18-19.『普曜経』第二巻、欲生時三十二瑞品第五(大正蔵、三巻、四九五ページ上—中)、『過去現在因果経』第一巻(大正蔵、三巻、六二七ページ下—六二八ページ上)、『方広大荘厳経』第三巻、誕生品第七(大正蔵、三巻、五五六ページ上—中)、『仏所行讃』第一巻、讃処宮品第二(大正蔵、四巻、四ページ中)、『太子瑞応本起経』上巻(大正蔵、三巻、四七四ページ中—下)。

(9)『太子瑞応本起経』上巻(大正蔵、三巻、四七四ページ中—下)、『過去現在因果経』第一巻(大正蔵、三巻、六二七ページ下)。

(10) *Lalitavistara* (ed. Lefmann), pp. 124-126.『普曜経』第三巻、現書品第七(大正蔵、三巻、四九八ページ上)では *Viśvāmitra* を「選友」と訳し、*lipiśālā* を「書堂」と訳している。『仏本行集経』第一一巻、習学技芸品第十一(同上、七〇三ページ中)では「学堂」と訳す。『方広大荘厳経』第四巻、示書品第十(同上、五五九ページ)では、ヴィシヴァーミトラを「博士」と呼び、学校を「学堂」と呼んでいる。

(11)『修行本起経』上巻(大正蔵、三巻、四六五ページ中)。



(12)『過去現在因果経』第一巻(大正蔵、三巻、六二八ページ上)。

(13)「宮詣で」イクシュバーク朝・三世紀・ナーガールジュナコンダ出土〈『デリー博』pl. 161〉、「学校(習いに行く」四世紀・ガンダーラ・ロンドン・Victoria and Albert Museum〈WOB. pl. II-36〉、二〜四世紀・ガンダーラ出土・ペシャーワル博物館蔵〈WOB. pl. II-37〉、八世紀・ボロブドゥール〈WOB. pl. II-38〉〈『遊る』p. 85〉、ペシャーワル出土〈*Sehrai Peshawar*. pl. 14, 15〉。

(14)〈『田枝』No. 13〉。

(15)『仏本行集経』第一一巻(大正蔵、三巻、七〇四ページ上)。

## (二)　若き日の悩み

かれは政治的な地位と物質的な享楽という点では恵まれていた。それはかれの出身を考えるならば、とりたてていわなくても解っていることである。しかし、かれはそれに満足することができなかった。かれは少年時代から、人生の問題に深く思い悩んだ。それにはかれの天性もあずかって力があったであろう。また母なき淋しさの憂鬱のためもあったであろう。

かれは若いときには、もの思いにふけるたちであったらしい。[1] かれは、後年に若いときを追想して、次のようにいったという。

『またわたくしは、父なるサッカ(＝浄飯王)が政務を行なっているときに、畦(あぜ)みちのジャンブ樹蔭にすわって、欲望を離れ、悪のことがらを離れて、粗なる思慮あり微細な思慮ある、遠離から生じた喜楽である初禅を成就していたのをよく覚えている。——これがじつにさとりにいたる

道であろう、と思って。』(*MN.* No. 36, Mahāsaccaka-sutta, vol. I, p. 246)

総じてインドの修行者が行なうように、かれも樹蔭にあって樹の根もとで禅定を修することを好んでいたのであろう。〔ここに初禅と呼んでいるのは、禅定の四つの段階としての四禅のうち最初のものである。四禅の体系は仏教でもやや遅れて成立したものであるが、それがここに適用されているのである。〕

かれが、すでに幼時のときから瞑想にふける傾向があったということを「ジャータカ序」は伝えている。種まき祭りに関連して、次のようにいう。

『ボーディサッタを取り巻いてすわっていた乳母たちは、「王さまの幸せぶりを拝見しましょう」と幕のなかから外へ出ていった。ボーディサッタは、あちらこちらと見廻していたが、だれも見えないので、急いで起きあがって両足を組み合わせてすわり、入る息と出る息を調整して第一段階の瞑想に入られた。乳母たちはあれこれと御馳走を食べることに追われて、少し遅れて帰ってきた。他の樹木の影は動いていたが、かれのいる木の影はまるくなったままだった。乳母たちは、「若君がひとりぼっちだわ」と、急いで幕を引きあげてなかへ入ろうとしたが、ボーディサッタが臥床のうえで両足を組み合わせてすわっておられるのと、その〔樹影の〕不思議さとに気づいた。そこで、王のところへ行って、

「王さま、王子さまがこのようにしておすわりになっています。他の樹木の影は動いておりますのに、ジャンブ樹の影はまるくなったままでございます」と報告した。王は急いでやってきて、



その不思議さを見て、

「いとし子よ、これでおまえを二度礼拝することになる」といって、息子を礼拝した。』(*Jātaka*, vol. I, p. 58)

右の一節の後半は後代の修飾がたぶんに加わっているであろうが、前半には歴史的事実も潜んでいると考えられる。

また、かれは後年サーヴァッティー国の「孤独者に給した人の園」にあって、少年時のことを回想して、もろもろの修行僧に対して次のように述べたという。

『わたくしは、いとも優しく柔軟であり、無上に優しく柔軟であり、きわめて優しく柔軟であった(身体が柔弱であり、優形であった)。わが父の邸には蓮池が設けられてあった。そこには、ある処には青い蓮の華が植えられ、ある処には紅い蓮の華が植えられ、ある処には白い蓮の華が植えられてあったが、それらはただわたくし〔を喜ばす〕ために、設けられていたのであった。わたくしは〔よい香りのする〕カーシー(＝ベナレス)産の栴檀香以外には決して用いなかった。わたくしの被服はカーシー産のものであった。襯衣はカーシー産のものであった。内衣はカーシー産のものであった。〔邸内を散歩するときにも〕寒さ・暑さ、塵、草、〔夜〕露がわたくしに触れることのないように、じつにわたくしのために昼夜とも白い傘蓋がたもたれていた。そのわたくしには、三つの宮殿があった。一つは冬のため、一つは夏のため、一つは雨季のためのものであった。それでわたくしは雨季の四カ月は雨季に適した宮殿において女だけの伎楽にとりかこまれ

ていて、決して宮殿から下りたことはなかった。他の人々の（一般の）邸では、奴僕・傭人・使用人には屑米の飯に酸い粥をそえて与えていたが、わたくしの父の邸では奴僕・傭人・使用人には白米と肉との飯が与えられた。』（*AN.* III, 38. vol. I, pp. 145–146）[2]

右の回想はたぶんに事実に近いものであろうと思われる。最近世のインドでも大王（マハーラージャ）と呼ばれる豪族はあちこちに宮殿をもっている。そのなかで王者が椅子に腰かけていると、侍者が傘をもって、そのうえにかざしている。庭園のなかにある美しい蓮池は、いまのインドでもあちこちに見られ、人はそこで浴みすることを好む。ベナレスは古来織物の産地として有名であるが、ゴータマ・ブッダの時代にも上質の綿織物を産することで有名であり、ネパールの南部でもそれを用いていたのであろう。

こういう優雅な生活に慣らされていたために、ゴータマ・ブッダは肉体的に弱く、ひよわで、精神的には優しい子であったのであろう。宮殿のなかに閉じこめられていたために、おそらく同じ年輩の子どもたちといっしょに遊ぶこともなかったのであろう。そうして繊細で敏感なセンスをもっていたことと思われる。

『わたくしはこのように裕福で、このようにきわめて優しく柔軟であったけれども、次のような思いが起こった、――愚かな凡夫は、自分が老いゆくものであって、また、老いるのを免れないのに、他人が老衰したのを見ると、考えこんで、悩み、恥じ、嫌悪している――自分のことを看過して。[3] じつはわれもまた老いゆくものであって、老いるのを免れないのに、他人が老衰したの



を見ては、考えこんで、悩み、恥じ、嫌悪するであろう、――このことは自分にはふさわしくないであろう、と思って。わたくしがこのように考察したとき、青年時における青年の意気（若さの驕り）はまったく消え失せてしまった。

愚かな凡夫は自分が病むものであって、また病いを免れないのに、他人が病んでいるのを見ると、考えこんで、悩み、恥じ、嫌悪している――自分のことを看過して。じつはわれもまた病むものであって、病いを免れないのに、他人が病んでいるのを見ては、考えこんで、悩み、恥じ、嫌悪するであろう、――このことは自分にはふさわしくないであろう、と思って。わたくしがこのように考察したとき、健康時における健康の意気（健康の驕り）はまったく消え失せてしまった。

愚かな凡夫は、自分が死ぬものであって、また死を免れないのに、他人が死んだのを見ると、考え込んで、悩み、恥じ、嫌悪している――自分のことを看過して。じつはわれもまた死ぬものであって、死を免れないのに、他人が死んだのを見ては、考えこんで、悩み、恥じ、嫌悪するであろう、――このことは自分にはふさわしくないであろう、と思って。わたくしがこのように考察したとき、生存時における生存の意気（生きているという驕り）はまったく消え失せてしまった。[4]』（*AN.* III, 38. vol. I, pp. 145–146）

さてゴータマ・ブッダが王者の地位をすてて一介の修行者となったからには、かならずや、右にのべられたような深刻な反省があったにちがいない。およそ迷っているわれわれ凡夫は、みずから老衰の運命を免れないのに、しかも他人の老衰したすがたを見ては嫌悪の情をいだく。しかしかれが感ず

るこの嫌悪の気持ちは、やがて自分自身に向けられてくるのではないか。自分もまたこのように老い衰える運命を免れないのに、他人が老いさらばえたすがたを見て嫌悪の情をいだくことは、なんというあさましいことだろう。病気や死についてもまた同様である。かれはわが身にひきあてて考えたのである。

この反省はなまなまとした実感をともなっている。成長した人はだれでも自分がいつまでも若々しくあって老いないように、また健康であって病気にならないように、そうしてけっきょくは死なないようにと願っている。人間の生存にねざしたこの希望は決してみたされない。

『ああ短いかな、人の生命よ。百歳に達せずして死す。たといこれ以上長く生きるとも、また老衰のために死す。』(*Sn.* 804)

原始仏教末期の仏教者は、右に述べたようなこの反省は三つの驕り(憍り)を表現していると考えた。それは「若さの驕り」(yobbana-mada)と「健康の驕り」(ārogya-mada)と「いのちの驕り」(jivita-mada)とである(*AN.* vol. I, pp. 146-147)。〈驕りたかぶる〉ということは、普通は、高位顕官にある人々、財産のある富豪、深い学殖を具えた学者、常人のまねのできぬ技術をもつ職人、芸術家のもつものであると考えられ、ときには世人はこういう高ぶった態度を示す人々を非難する。しかし問題はもっと深刻である。非難する世人自身がじつは〈驕り〉をもっているのである。自分は若い、元気だ、生きているということを誇っている。その驕りは人間に本質的なものだ。そして空虚なものである。まさに人間存在の本質をついているのである。



人間存在の深淵には欲望が渦巻いている。それが人間を支配し、人間はそれにとらわれていてそのために苦しみも起こるということを、かれはすでに青年時代に自覚していた。ただかれはそれ以上のたよるべきものをもたなかったのである。かれは後年シャカ族のマハーナーマに対して述懐していった。

『マハーナーマよ、わたくしがさとり(saṃbodha)を開くよりも以前に、まだ正覚に達していないで、求道者(bodhisatta)であったときに、次のように正しい知慧によって如実によく見通した。

「欲望は楽しみの少ないものであり、苦しみ多く、悩み多く、そこには禍いがはなはだしい」ということを。しかしわたくしは、欲望以外のところに、悪のことがら以外のところに、喜び楽しみ(pītisukha)を体験しなかった。それよりもさらに善きもの(santatara)に到達しなかった。そのかぎりにおいて、わたくしは欲望に魅せられないでいるといい得るのではなかった。』(*MN.* No. 14, Cūladukkhanda-sutta, vol. I, p. 92)

しかし、かれはついに欲望を超えるものを見出したのである。

『しかしもはやわたくしは「欲望は楽しみの少ないものであり、苦しみ多く、悩み多く、そこには禍いがはなはだしい」ということを正しい知慧によって如実によく見通したのである。しかも欲望以外のところに、悪のことがら以外のところに、喜び楽しみを体験し、それよりもさらに善きものに到達した。それでわたくしは欲望に魅せられないでいるといい得たのである。』(*ibid.*)(5)

世俗の生活にいたときには欲望には案外楽しみが少なく、苦しみ悩みが多いということにすでに気づいていたが、なおそれに魅せられて、〈より善きもの〉、真の楽しみを見出し得ず、悩んでいた。これを見出したのが、かれの〈さとり〉であったのである。

人間の老・病・死に関する反省を説く前に引用した長い文章（パーリ文）に相当する漢訳ではそれよりもいくらか詳しくなっているが、そこではゴータマ・ブッダが自分の遊園におもむくために外出したときに、世人のすがたを見て、人間の老いと病いとを反省するにいたったという。前掲パーリ文の老・病・死に関する反省の文の前に、若き日のもの思いを追憶する、次の文が加わっている。

『われ出でて園観に至らんと欲せしとき、三十名の騎り手が〔最〕上の乗りものをえらび、鹵簿の前後に侍従して導き引けり。況んやまたその余のものをや。われにこの如意足あり、これは最も柔軟なりき。われまた憶うに、昔時、田を作る人が田の上に止息するを看たり。〔そこで〕閻浮樹の下にいたり、結跏趺坐し、欲を離れ、悪・不善の法を離れ、覚あり観あり、離生喜楽にして初禅を得て、遊ぶことを成就せり。

われはこの念をなせり、多聞ならざる愚癡の凡夫は、自ら病法あれども、病を離れず。……』

（『中阿含経』第二八巻）

かくして病と老とについて説くが、死には言及していない。ただし他の漢訳の相当文では老・病・死の三つについて説いている。ともかく漢訳では太子がこのような宮殿の往復の途中で、老・病など人間の苦しみを実際に見て反省を起こしたという記述が加わっている。すなわち老いさらばえた人を



見ては生の苦悩を痛感し、病人や死人を見てはそぞろに無常のこころを起こしたという。

伝説の発展の次の段階になると、太子が十四歳のときに、東の城門を出ると老人に会い、南の城門を出ると病人に会い、西の門を出ると死人の屍を見た。そうしてその帰途に出家修行者を見たという。そのたびごとに父王は、かれが出家するのではないかとの心配をいだき、『また五欲を増して昼夜に娯楽せしめぬ』という。このような伝説が発展して、後世に図式化して四門出遊の伝説が成立したのである。これに対して生の苦しみを加えて四苦とし、さらに八苦とするのは、後代の教義学的反省が加わってからあとのことである。

これと同じ反省がやや遅い経典においては定型化して説かれている。

『わたくしもまた、かつて正覚を得ないボーディサッタ（さとりを得る前の仏）であったとき、みずからは生まれるものでありながら、生まれることがらを求め、みずからは老いるものでありながら、老いることがらを求め、みずからは病むものでありながら、病むことがらを求め、みずからは死ぬものでありながら、死ぬことがらを求め、みずからは憂えるものでありながら、憂えることがらを求め、みずからは汚れたものでありながら、汚れたことがらを求めていた。』

ここの文章は、一般の日本人には解りがたいが、こういう意味に解し得るであろう。――「みずからは生まれたものである」から、すでに生の苦悩を内にもっている。それなのに、さらに「生まれることがらを求める」、つまり子を欲しがったり、財産や名誉の生ずることを求めているのであるから、苦悩がさらに余分に加わることになる。「みずからは老いるものであり」、老いるという苦悩をすでに

もっているのにさらに「老いることがらを求める」、すなわちやがては老いゆくものである子孫や親族や、また「老いる」すなわち消耗するものである財産や名誉を求めている。また「みずからは病むものである」、すなわちやがては病気に罹るはずである身体をもっているのに、同様に「病むことがら」すなわち病む身体をもっている他人を求める。また「みずからは死ぬものでありながら」、すなわち自分はかならず死ぬものでありながら、やはりかならず死ぬものである親族や他人を求める。自分が死ぬはずであるならば、死なないものを求めたらよいはずではないか。ところが人間はそうはしない、云々、と解するならば、意味が通じるであろう。所詮ここにひとつの矛盾が認められるというのである。

『そのときわたくしはこのように思った、――なにがゆえにわたくしは生まれるものでありながら、生まれることがらを求め、みずから老いるもの、病むもの、死ぬもの、憂うるもの、汚れたものでありながら、老いることがら、病むことがら、死ぬことがら、憂うることがら、汚れたことがらを求めるのであるか？　さあ、わたくしはみずから生まれるものではあるけれども、生まれることがらのうちに患いのあるのを知り、不生・無上なる安穏であるニルヴァーナを求めよう。わたくしはみずから老い、病み、死に、憂い、汚れたものではあるけれども、それらのことがらのうちに患いのあるのを知り、不老・不病・不死・不憂・不汚である無上の安穏・ニルヴァーナを求めよう。』(*MN. Ariyapariyesana-sutta, vol. I, p. 163*)[10]

経典はこのような求道の努力を「聖なる求め」(*ariyā pariyesanā*)と呼んでいる。四門出遊の話はパ



ーリ語経典（四ニカーヤ）のうちには見あたらない。ただ過去の仏であるヴィパッシン(*Vipassin*)仏の物語を叙するところで、この仏がいまだ出家しない前に王子であったときに、車に乗って宮殿から外に出て遊園におもむく途中で、老いた人、病んだ人、死んだ人を見て、深刻な反省を起こして、御者と対談したということが伝えられている。[11] これと同じような筋が仏伝にも取り入れられている。[12]

老人、病人、死人、出家修行者を見たことを、「ジャータカ序」は非常に詳しく述べている。

『それから、ある日のこと、ボーディサッタは遊園へ出かけようと思いたち、御者を呼んで、

「車の用意をしなさい」といわれた。かれは、

「かしこまりました」と答えて、高価な最上の車にとりわけよく飾りつけをして、白蓮の花弁の色をした四頭の国王用のシンドゥ産の馬をつないで、ボーディサッタにその旨を告げた。ボーディサッタは神々の宮殿にも似た車に乗って、遊園へ向かって進んだ。神々は、

「シッダッタ王子の正しいさとりをひらかれるときが近づいた。その前兆をわれらが示すことにしよう」と、一天子を、老い朽ちて、歯が抜け、髪が白く、前かがみのくたびれはてた身体で、杖を手にわななき震えている者に作りだして見せた。それをボーディサッタも御者も目にした。

そこで、ボーディサッタが御者に、

「これ、この人は何という者であるか。この者の髪は他の者たちのとは違っている」と、たずねられ、その〔御者の〕返答を聞くと、

「ああ、生まれることとはなんと厭わしいものか――じつに生まれたものに老いが認められると

は」と、心も乱れ、その場からひき返して宮殿にあがってしまわれた。

王は、

「どうしてわしの息子は急に戻ってきたのか」とたずねた。

「王さま、老人をごらんになったからでございます。老人をごらんになると、あのかたは出家なさるでしょう」と〔廷臣たちは〕答えた。

「どうしてわしを困らせるのか。早く息子のために歌舞の用意をせよ。幸せを感じているうちは、出家の気持ちを起こすまい」といって、見張りをふやし、すべての方角にそれぞれ半ヨージャナにわたって配置した。

また、ある日のこと、ボーディサッタが同じように遊園に行こうとしていたときに、神々が作りだした病人に目をとめ、前と同じようにたずね、心乱れて、ふたたびひき返して宮殿にあがってしまわれた。王もやはり質問し、前述のように手配して、またも見張りをふやし、四方あまねく三ガーヴタの区域に配置した。

さらにまた、ある日のこと、ボーディサッタが同じように遊園に行こうとしていたときに、神々が作りだした死人に目をとめ、前と同じようにたずね、心乱れて、ふたたびひき返して宮殿にあがってしまわれた。王もやはり質問し、前述のように手配して、またも見張りをふやし、四方あまねく一ヨージャナの区域に配置した。

さらにまた、ある日のこと、〔ボーディサッタが〕遊園に行こうとしていたときに、前と同じ



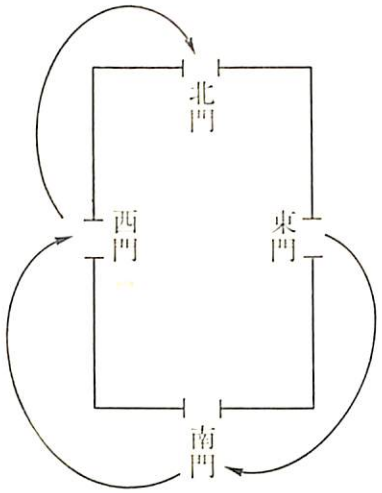
ように神々が作りだした、整然と上下の衣をつけた出家者に目をとめ、

「これ、この人は何という者であるか」と御者にたずねられた。御者は、それまで仏の出現されることがなかったため、出家者や出家者の功徳を知らなかったけれども、神々の威力によって、

「王子さま、これは出家という者でございます」と答え、出家の功徳を説明した。ボーディサッタは出家ということに感銘を受けて、その日は遊園まで行かれた。』(*Jātaka*, vol. I, pp. 58–59)

ただし「ジャータカ序」作者はここで萌芽的ながら原典批判的態度を表明している。

『しかし「長部経典」の誦出者たちは、「四つの前兆をただ一日のうちに見て行かれた」と述べている。』(*ibid.* p. 59)




ともかく後世にはこれが定型化[13]して四門出遊の伝説[14]となった。それによると、太子は王城の四つの門から出遊して、老者・病者・死者および修行者に会い、また虫や鳥がたがいに食いあうのを見て、世の中が悲惨で頼りないことを痛感し、やがて出家する基となったというのである。

この伝説は機械的に整理されたという趣きがある。すなわち、城の東門から外へ出て老

人を見、南門から外へ出て病人を見、西門から外へ出て死人を見、北門から外へ出て出家修行者を見たというのであるが、この、時計の針のように廻ったというのは、ヴェーダの祭壇の周囲をバラモンたちがへめぐる方向と同じであり、また凱旋軍が故郷の都市に帰り、城壁の周囲を三たび廻るという順序に合致する。だから老・病・死・出家をこの順序にあてはめただけなのである。シッダッタ太子が実際にこのように順次に実見したというわけではない。

しかしともかく定型化された四門出遊は、後代の仏教美術においても、重要なテーマとなっている。[15] 珍しい作品であるが、新婚の二人が人生の生老病死を観ずるという図[16]がガンダーラに残っている。その意義は重要である。この図の含意する趣旨によると、生老病死を観じて無常をさとったということは、妃もシッダッタ太子と思いをともにしている。この趣旨によると、太子は妃をすてたのではなくて、妃との共同理解を実行したということになる。

また太子が農夫が農耕に辛苦しているすがたを見て感に打たれた、という話が伝えられているが、[17] これも仏教としては重要な問題である。老・病・死は自分の問題である。しかし農耕に辛苦している人に同情するということは、他人の問題を自分の問題とすることである。ここに仏教の利他主義思想の出発点がある。

ことに野外を見ていると、小鳥が虫をついばむというような現象が見られる。こういう問題をどう解決するか、ということが、仏教にとっても大きな問題となった。

(1) 〔若き日の瞑想に関する記述〕『方広大荘厳経』第四巻、観農務品第十一（大正蔵、三巻、五六〇ページ中）、『過去現在因果経』第二巻（大正蔵、三巻、六二九ページ上―中）、『仏本行集経』第一二巻、遊戯観瞻品第十二（大正蔵、三巻、七〇五ページ中―七〇七ページ上）、『普曜経』第三巻、坐樹下観犁品第八（大正蔵、三巻、四九九ページ上―下）。

(2) 『中阿含経』第二九巻（一一七）柔軟経（大正蔵、一巻、六〇七ページ下―六〇八ページ）、『増一阿含経』第一二巻（大正蔵、二巻、六〇八ページ）。ただし説いた場所のことは、パーリ文にはなくて、漢訳にのみ出ている。またヴィパッシン（Vipassin）仏の生涯にことよせて同様のことの説かれている場合もある（*DN.* II, p. 21）。

(3) atisitvā. この語は atisarati (to overlook, ignore) に由来する（V. Trenckner : *A Critical Pali Dictionary*, vol. I, part 3, p. 91）。

(4) 漢訳には、「老法、病法、死法」という語が用いられているが、「老いることを本性（定め）としてもっているもの」云々ということであり、現代語に訳すならば、「わたくしも老いるべく……病むべく……死ぬべく運命づけられていて、その運命を免れることはできない」というべきであろう。

(5) 『中阿含経』第二五巻（一〇〇）苦陰経（大正蔵、一巻、五八六ページ―五八九ページ）。

(6) 大正蔵、一巻、六〇七ページ下―六〇八ページ上。

(7) 『増一阿含経』第一二巻（大正蔵、二巻、六〇八ページ中―下）。

(8) 『五分律』第一五巻（大正蔵、二二巻、一〇一ページ中―一〇二ページ上）。ここでは城の東門、南門、西門から出たことには言及しているが、北門には言及していない。ただ『即ち車を廻らして還る』（一〇一ページ下）となっているだけである。また『普曜経』第三巻、四出観品第十一（大正蔵、三巻、五〇二ページ下―五〇三ページ上）、『仏本行集経』第一四巻（大正蔵、三巻、七一九ページ下―七二五ページ中）。

(9) 釈尊が修道僧たちのために述べた談話のかたちで、出家にいたるまでの反省、アーラーラ・カーラーマ、ウッダカ・ラーマプッタの二人の師について修行したこと、ウルヴェーラーにおける独坐と成道、伝道の決意をするまでの経過、〈鹿の園〉における最初の説法が、まとめて「聖求経」(*MN.* No. 26, Ariyapariyesana-